

〈論文（民俗学）〉

日本磯漁伝統の研究 [Ⅶ]

—磯漁民（見突き漁民）の漁撈伝承研究—

田 邊 悟

要旨

人々の暮らしの中における「伝統」とか「伝承」という語彙は、「変容」という語彙とは逆に、未来に向って永劫に引継がれていくようにとらえられがちだが、本稿では主題である「磯漁伝統」の継続性としてではなく、「伝統」が、いままさに消滅して「変容」しようとする過程の一事例としての内容を包含している。

しかも、本稿でいう「変容」は、変化することではなく、これまで有用であったものがまったく無用で、その経済的な価値、利用（使用）価値をもたなくなってしまうという価値の消滅であることに注目した事例である。

本稿ではその一事例として新潟県岩船郡粟島（粟島浦村）をあげる。

キーワード

磯漁 見突き漁 アワビ ミズダコ 海村文化 漁撈伝承

目 次

- (1) 研究目的(承前)
- (2) 磯漁の伝統的存在形態に関する実証的調査と研究
- [I]新潟県岩船郡粟島の「イソミ」
- (一) はじめに
- (二) 地域の史的背景など
- (三) 漁業生産歴と漁法
- (四) 農業生産歴と農業
- (五) イソミ(漁法)と漁具
- (六) 漁船(サンパ)・その他の聞取り
- (七) まとめ

(1) 研究目的 (承前)

本稿でいう「磯漁」とは、ムラの地先における磯浜海岸や砂浜海岸で魚貝藻（介）類の捕採にあたる男女の漁撈民・漁業者一般を指すが、裸潜水漁によって魚貝藻（介）類の捕採にあたる、所謂蟹人（海人Ⅱ海士・海女）は含まれていない。含まれない理由は、裸潜水漁撈者である蟹人については別稿であつたためである。したがって蟹人に関しては拙著『日本蟹人伝統の研究』（法政大学出版局）を参照されたい。また、「徒（歩）磯漁」とよばれる小型漁船を使用しない「徒」による磯漁も含まれていない。

(2) 磯漁の伝統的存在形態に関する実証的調査と研究

[I] 新潟県岩船郡粟島の「イソミ」

(一) はじめに

北海道沿岸から青森県・秋田県・山形県・新潟県・富山県等に至る東北地方から北陸地方にかけての日本海側の地域には、いわゆるミズダコが生息している。ミズダコの生息分布は太平洋側の青森県・岩手県・宮城県等の三陸海岸も含まれる。そして、このミズダコは伝統的に磯漁をおこなってきたこの地方の漁民にとっては重要な捕獲対象物となってきた。その理由は、他のマダコ・イイダコ・アシナガダコ・（地方によりテナガダコともいう）の主

な四種類のうちで最も大きなタコで、全長三メートルにもおよぶものがあり、肉質はやわらかく、味はマダコに比較して劣るが、個体が大きいので、わが国におけるタコの水揚げ量としては最も多いためである。

したがって、ミズダコは貴重な水産資源であるとともに、本稿であつかった「栗島」のように「蛸は島の正月にはなくてはならないもの」といわれるように、「晴れの日の食材であり、嗜好品ともいえる食物」なのである。

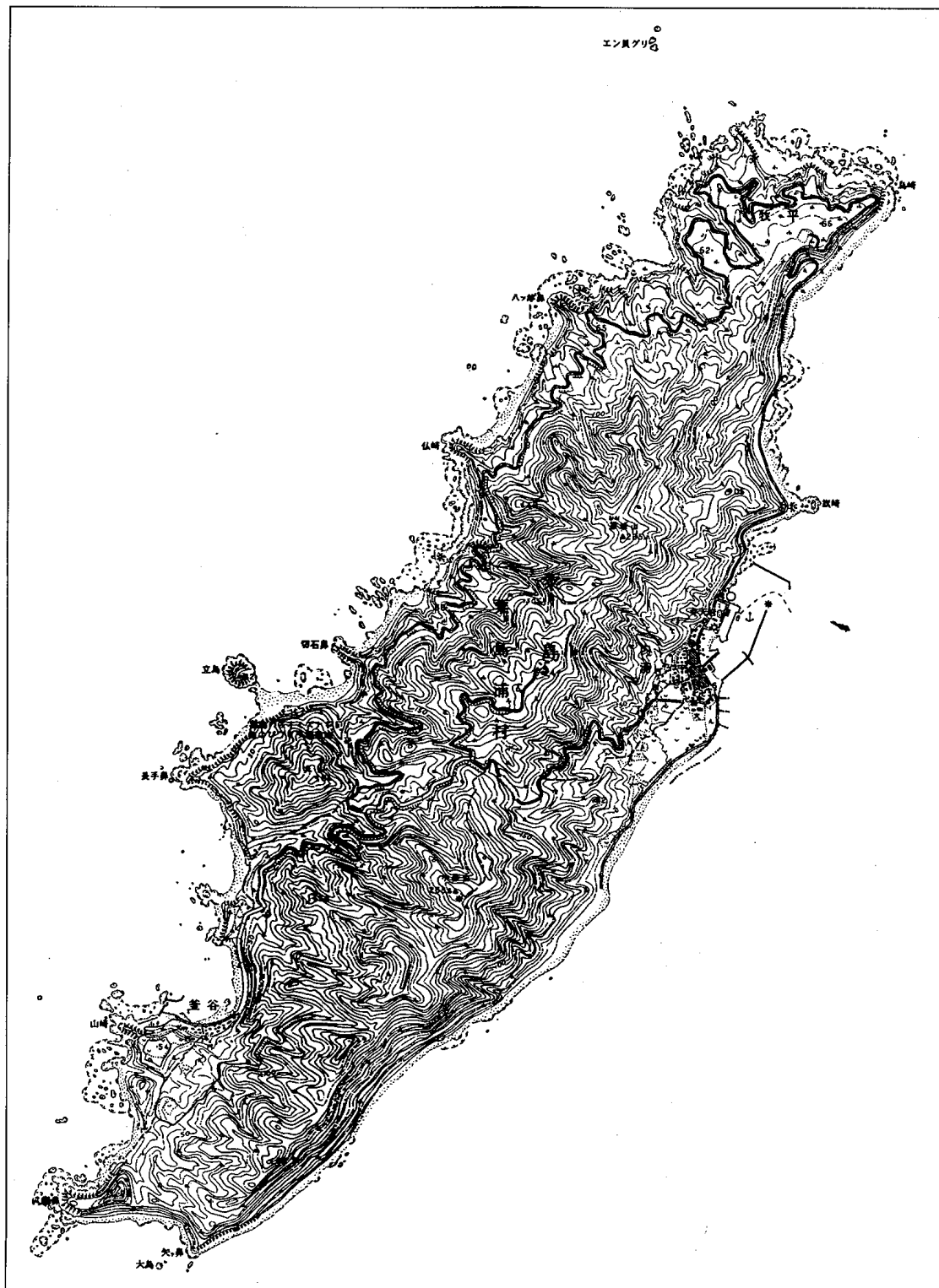
したがって、この地方での磯漁は、他の日本各地沿岸の磯漁とは異なる内容、特色をもっている。すなわち、ミズダコを捕獲するためにかかわる漁撈技術、漁撈用具（民具）、漁撈伝承・民俗知識・習俗等、他地方にはないものを多く残し、今日に伝えていることである。その特筆すべき一事例が「蛸穴」とよばれる漁場・漁業権などのかわりといえる。

本稿では上述のような点を主軸に、新潟県岩船郡栗島浦村における釜谷かまやと内浦うちうらの調査結果について述べる。

（二）地域の史的背景など

上述したように新潟県岩船郡の「栗島」は、村上市の海上約三十五キロ沖にあり、現在、村上市の岩船港から定期船が通っている。島の面積およそ九・八六平方キロ、世帯数百三十八、人口約四百三名（平成十五年現在）、内浦と釜谷の二集落がある。が、内浦の方が家数・人口は多く、定期船の発着をはじめ、すべて島の中心になっているのが現状である。

この島は戦国時代以降、明治期まで米沢藩領に組み込まれ、明治四年の廃藩置県により、村上県に、また、明治



新潟県岩船郡栗島
国土地理院発行 1:25,000

二十二年（一八八九）、栗島浦村となった。

近世末における村高は「此島田畑高二百八十五石九斗七升二合なりといえども、田は僅に四町ばかり前浜近所にあり」^{注(1)}とみえる。

江戸時代の後期、小泉善平（号を其名^{きめい}という）によって著された『栗島図説』^{注(2)}によれば、「栗島の産に良材なし。松杉おほからず。稀にあるも小木にして家具などにハ用ひかたし。家作の時は本国より買調ひて用ゆ。（中略）竹多し。但し、大めう竹・しの竹斗にして、其外の竹ハなし。（中略）魚介に^{アワビ}鰆多し、水上に魚油をそゝきて塵埃開き、水底を見とをし、魚火をもつてとる。水を潜りとする事ハなし。鯛、さゞゑ、敏魚^{いしちう}、章魚^{たこ}、河豚^{かぶ}、方頭魚^{あまだい}の類多し、皆鈎してとる。海草に雪海苔、アヲサ、ツルモ、心太、裙帶芽^{わかめ}、イゴ、海蘊、神馬草（島人はヲ浜菜といふ）海索麴^{うみそうめん}、海麦の類あり。都て本国へ交易す」とみえる。

さらに同書中に、「島人の家業、男ハ海に出て魚を鈎、又、鰻ヲつき、海草をとりて本国^江売りわたし、或ハ耕作をつとめ、或ハ松前、箱館^江日傭を稼に出、又、本国村上・岩舟の辺、蒲原郡の中最寄の浦々へ奉行に出る^茂あり、女は塩を焼き、布木綿を織、耕作をなし、薪を伐る」とみえる。

この書（『栗島図説』）の著者である小泉善平（号を其明という）は宝暦十一年（一七六一）に新潟で生まれ、天保七年（一八三六）に七十六歳で病歿したが、栗島へ渡つたのは天保三年六月であつたことが著書に記されている。また、真水 淳による『栗島図説』の解題によると、本来はその書名どおり「栗島図」と対応するものであるが、同図の方は、県立図書館蒼軒文庫の中に含まれていないという。

前掲の『栗嶋紀行』の著者である小泉蒼軒は、小泉其明の長子として寛政九年（一七九七）に生まれ、父其明の志を継いで地理学にもっとも精通し、明治六年（一八七〇）に七十七歳で歿したとされる。

その他、明治二十八年刊の『越後風俗志』^{注(3)}中に、「釜屋(谷)」の項があり、「往年、此湾内に蠣^{かき}(牡蠣)おびただしく繁殖し、水底に一の山を築^{つく}たるも、島人は其何たるを識^しらず其俣^{そのま}になし置^{おき}たるに、出羽国の漁夫、之れを発見し、或年の好時節、大船数艘を装^{よそ}ひ来り、細大洩^{もろ}さず採取して去りしより、島人は今は其形を見ざるに至りしと言^いう。」とみえる。

本調査中には釜谷において、男子の裸潜水漁業者がウェットスーツを着装して数人がカキ採取をおこなっていた。前掲の通り、栗島においては裸潜水漁撈者(海士・海女)はいないと記述されているところを見ると、ウェットスーツの普及などより、漁法の変化がみられたといえよう。

同書には、明治二十七年度の調査結果として、「両字(内浦と釜谷) 合せて百戸、人口男二百九十二、女二百九十三なり」とみえる。また、明治時代に三回もの大火に見舞れたため古文書等の史料はないという。

近年においては、昭和四十七年(一九七二)に新潟県教育委員会が調査報告書として刊行した『栗島』(新潟県文化財調査年報第十一)には「島の民俗」の項目はあるが本稿で参考として引用すべき内容はない。ただ栗島の「民具」の中に、タコツキヤス・タコカギ・ワカメネジリ・イガイトリ・グミトリ(カサガイを岩からはがす)・モテの棒(エゴグサ、テングサ採取用)・サザエヤス・アワビカギなどの漁具についての簡単な解説と写真が見えるぐらいが参考になる。

なお、詳細にわたる栗島の歴史や島の焼畑(アラドコ)など等については、栗島浦小学校の大滝友和編著による『栗島見聞録』にゆずる。

(二) 漁業生産歴と漁法

粟島では磯漁（見突き漁）を「イソミ」という。「イソミ」によるアワビ・サザエの採取は八月初旬より約一ヶ月間おこなわれた。アワビを採取することを「アワビツキ」ともいった。

また、イソミによってタコを捕獲したが、粟島ではオスのタコをミズダコと呼び、メスのタコをメダコとかマダコと呼んで区別した。したがって、捕獲してからでなければ、オス・メスの区別はつけられなかったので、一般にはタコとしか呼ばないが、大型のいわゆるミズダコを主に漁獲してきた。漁期は十二月中旬頃にはじまり、翌年の三月いっぱいまでつづけられるのが普通。

タコは毎年、二月頃になると一つの穴にオス・メスの二匹が入っていることが多かったので漁獲量が増したと聞いた。

タコを捕獲するには、船上より、最初はタコ穴の中を「マガリヤス」で探り、出てきたところを「オウツキヤス」（タコツキヤス）で突きとる。

イソミによるイソザカナ等の捕獲は年中おこなってきたが、特にヒラメは九月初旬から十月いっぱいまでが漁期で、この期間は「ヒラメツキの時期」といつていたほどヒラメがよく突けた。大きなヒラメは十二キロから十三キロのものもいた。寒くなりはじめると、イソバタに入ってきて、海藻の上に乗っているようなこともあったという。アイナメ・メバル等のイソザカナは、主に九月初旬から十一月中旬頃まで捕獲がおこなわれた。アイナメは十一

新潟県岩船郡粟島浦村釜谷の漁業生産暦(新暦)

小萩 勇蔵氏 聞き書
(昭和9年2月20日生)

魚種・漁法	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	摘 要
イ ソ ミ													アワビ・サザエ マダコ(メス) ミズダコ(オス) ヒラメ アイナメ・メバル シマダイ・クロダイ ワカメ エゴ
一 本 釣													マダイ・マイカ スズキ
ハエナワ													タイ・ブリ アブラザメ
刺 網													タラ (底刺網) タイ・ブリ ヒラメ トビウオ・タイ ヒラメ・イナダ
サメ底刺網													アブラザメ
定 置 網													ヤリイカ マダイ アオリイカ
大 謀 網													タイ

(平成15年8月8日調査)

月中旬になると産卵のために集まる（かたまる）ので、そこをねらった。

その他、シマダイ・クロダイ・ジンダイ、たまにはマダイなどを捕獲したこともあった。

イソミによる海藻採取の主なものはワカメとエゴであった。ワカメは四月初旬から採取がはじまり、六月中旬までつづく。

エゴは八月一日が解禁日で、八月二十日頃まで採取した。エゴには採取する時期があり、あまり早い時期に採取すると「とけてしまう」といい、八月に入ってから採取するように決めていた。

一本釣は、はやければ四月の初旬にはじまり、七月いっぱいまでおこなわれた。漁獲があれば八月中旬頃までつづけた。主な魚種はマダイやマイカ、スズキなどであった。マイカは五月から六月にかけてが漁期であった。

ハエナワは年間を通しておこなわれ、タイ・ブリのほかアブラザメを漁獲した。夏季でもブリが獲れることもあった。

刺網ではタラを一月初旬から二月いっぱいまで、タイ・ブリ・ヒラメなどを二月初旬から六月中旬頃まで、トビウオ・タイ・ヒラメ・イナダ・ブリなどを七月初旬から十二月いっぱいまで漁獲した。トビウオは七月、八月頃に多く漁獲した。

アブラザメも底刺網を使って、一月初旬から三月下旬まで操業されてきた。

定置網ではヤリイカを三月いっぱい、マダイ・ブリ・ヒラメを四月初旬から七月中旬頃まで、アオリイカを九月初旬から十一月中旬まで漁獲した。

大謀網は大型定置網ともよばれ、一世帯から一名ずつが参加して共同でおこなわれてきた。主にタイを漁獲するのが目的であった。四月初旬にはじまり、十一月中旬頃までおこなわれた。釜谷地区では、一月、二月の季節は風が強くなり海が荒れるので、漁がむずかしいため、内浦とは異なる漁になった。

(四) 農業生産歴と農業

釜谷に在住の松浦キイ氏（農業生産歴と農業にかかわる話者）は、昭和十九年に結婚し、実家のある同島の内浦から一つ山越えをした釜谷に移り住んだが、稼ぎ先では、水田を約一反持っていたと聞いた。

また、小萩勇蔵氏宅（農業生産歴と漁法にかかわる話者）では水田を八畝所有していたという。

稲は、五月初旬に田植えをおこない、早ければ九月下旬に刈り入れをおこなったが、遅れると十月下旬にかかって収穫した。

大麦や小麦は、夏草でボウボウになった畑（切替畑・焼畑）の雑草に火を放って肥料にした後（この農作業をや

キグサといった）、「アラドコ」（新床）を造成し、大麦は九月十日過ぎに蒔くのが普通であった。毎年、秋の「彼岸までには種をおとす」というのが目安となっていたという。

小麦は大麦を蒔き終わった十月初旬に蒔くが、収穫時期も大麦を刈り取った後の七月にはいつておこなうのが手順であった。

アワは、五月初旬に種蒔きをおこない、九月下旬には収穫した。収穫したアワは餅にする。

キビもアワと同じ時期の五月初旬に蒔き、九月の二十十日頃に刈り入れる。収穫して脱穀したキビは、石臼でひいて粉にし、「キビダンゴ」にするために、丸めたものを茹であげて食べたり、キビ餅にするために蒸してから木製の臼と横杵を用いてつき、餅にして食べた。

大豆は六月の上旬から二十日頃にかけて種を蒔

新潟県岩船郡粟島浦村釜谷の農業生産暦(新暦)

松浦キイ氏聞書
(大正13年12月4日生)

種 類	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	摘 要
米 (稲)													田を一反所有していた
大 麦													9月10日過ぎから彼岸までに蒔く
小 麦													
粟													餅にする
黍													キビは二十十日頃に収穫する
大 豆													6月20日頃に種を蒔く
小 豆													
馬 鈴 薯													7月下旬雨多い早く掘る
サツマイモ													10月中旬に掘った
その他・ソバ・大根・カブなどの野菜づくりなど、自家消費量ほどは栽培した。 大根やカブもアラドコで栽培したので、特に肥料は与えなかった。													

(平成15年8月8日調査)

き、十月中旬頃に収穫した。自家製の味噌づくりには大豆は欠かせない作物であった。どこの家にも「ミソギネ」と呼ばれる豎杵があったという。

小豆も大豆と同じく六月の上旬から中旬にかけて蒔いたが収穫はやや遅れて十月の下旬頃。大豆や小豆は、大麦や小麦、あるいは馬鈴薯の裏作（二毛作）として栽培することが多かった。

小麦は、粉にしてダンゴを作って食べることが多かった。

馬鈴薯は三月中旬頃から四月初旬頃になってタネイモを植えつけ、七月中旬頃から下旬にかけて収穫する。収穫が遅れ、七月下旬頃になって雨が多く降ると馬鈴薯はくさってしまうので、できるだけ早く掘るようにしていた。サツマイモは六月初旬頃から下旬にかけて苗を植えはじめた。収穫は十月中旬頃。

（五）イソミ（漁法）と漁具

「サンパ」とも呼ばれる「イソミブネ」の船上から海中、海底を見定め、各種の「ヤス」等を用いて魚貝藻（介）類の捕採をおこなう漁法を粟島では、「イソミ」とよんでいることは上述した通りである。

イソミによりアワビを採取することを「アワビツキ」という。その時に用いる道具がカギ状をしているので、その道具を「アワビカギ」という。「アワビヤス」の名もある。

アワビカギには柄の長いものと短いものがあり、普通、数本を持って出かける。

アワビカギのモト（先端）の部分は鉄製で、すべて疑問符型をしており同型だが、浅い場所で長い棹（柄）の道具は使用しにくいので短い棹のものを使う。水深にあわせて使い分けるのである。

アワビカギ（アワビヤス）には、幅約二センチ、長さ約八十二センチほどの竹材の「タケガラ」（ヤスガラともいう）と呼ばれる弾力性のある柄が付けられている。これは弾力をもたせるために竹の皮の部分を残して薄く削つたもの。その後、カシ材の棒（棹）が付けられ、水深にあわせて調節される。

アワビは、岩礁の平らな場所に生息していることが多いので、アワビカギで、アワビの殻の薄い部分にかけ、引っぱりあげて剥がす。岩礁の横側にいるアワビは「ヤス」で突くこともあるが、なるべくいためないように「カギ」で採取する。

話者（小萩勇蔵氏）所有のアワビカギを実測すると、鉄製の疑問符型のカギは全長十一センチ、カギの部分の長さ五センチ、カギの横幅七センチ、内側のフトコロの部分六センチ。カギは根元の部分が四角で一片が〇・五センチだが先端にいくにしたがつて丸味をおびて尖っている。（写真参照）

また、カギの根元の部分は平板状になっており、六センチの長さがある。この部分を竹材の「タケガラ」にだきあわせるようにして細紐で縛りつける。タケガラの長さは六十五センチ、幅は二センチで、タケガラは竹の表面部分の皮を残して薄く削り、弾力性をもちやすくしてある。タケガラが折れたときのために細紐がそえてある。

このタケガラに、水深にあわせて長さ二メートルから四メートルほどのカシ材の棒（棹）をつなげていく。

アワビカギの製作は栗島浦村の内浦にあった本保鉄次郎^{ほんぼ}という鍛冶屋に注文して製作してもらった。現在（調査

時)の郵便局裏あたりに鍛冶屋はあったという。

サザエは「サザエツキ」とか「サザエヤス」という漁具を用いて採取する。「サザエツキヤス」ともいう。

先端は鉄製で四本に枝分かれしており、四角型の角にあたる部分に位置するように配置されて先端が広がっており、この四本の間にサザエをはさみ込んで採取する。岩礁上に生息するサザエを上からおさえつけるようにするのである。

鉄の枝分かれしている部分から先の長さは二十三センチ。先端の四角い(四隅にあたる)部分の一边は五センチ、それぞれの太さは根元で約〇・六センチで、先端に行くほどやや細くなっており、チューリップの花のようにいくぶん広がりをもった形状をなしている。(写真参照)

四本の枝状の部分は、根元で一本にまとめられ、カシ材の柄にすげられ、鉄製の丸輪(環)でとめられている。カシ材の長さ五十五センチ、太さ約二センチで、その上に竹の棹を水深にあわせて継げて用いる。

サザエツキの先端が四本にわかれていた形状のものは、話者が若い頃から使われていたという。製作地はアワビカギと同じく、島内の内浦にあった鍛冶屋に注文して製作してもらった。

タコは蛸穴に入っているのを突きとって捕獲するのがほとんどである。蛸穴は浅い場所で三尺から五尺、深い場所では六尺から七尺というのが普通である。

「蛸穴はカンノジ(冬の寒い時)の荒れた磯海をサンパ(イソミブネ)をあやつりながらやるので、船のこなし

方は風と波とで熟練を要する。蛸穴は一般の人々の見つけるのはひどく困難なものである。何しろ八貫目もあるような大ダコでも、ヤス(幅二寸位)が入るか入らないかというぐらいの小さな穴から出入りするというのだから、一般の素人が見つけにくいのも無理はない。伝授には同船して、蛸穴をカド目といって、山をかけるのであるが、これがちよつとやそつとでおぼえられないという。こうしてカド目をつけて覚えるのである」といわれるようにタコアナの所在を見つけるのはむずかしい。注(4)

タコアナは主にノタ(波)の入らないようなところにあつて、石が積み重なり、中が砂地か砂利になっているような所と、クリ(岩)穴とがある。タコを捕獲するためには、「マガリヤス」(タコツキヤスの名もある)と呼ばれる先端が二本(二又)ふたまたになつた鉄製のヤスに、オウネンボウ(カマツカ)材で自製した柄をつけて用いる。

タコを捕獲するためには「マガリヤス」を用いることは上述の通りだが、鉄製のマガリヤスの部分は全長が二十センチ、二本(二又)に分かれている先の部分十三センチ、ヤスの直径〇・六センチほどで先端は左右から内側にむいてイカシが付けられている。イカシの長さ約二センチ。(写真参照)

このマガリヤスの鉄製のものを、長さ約一メートル八十センチほどのオウネンボウ(カマツカ)の枝を利用してつくつた柄に取付ける。枝の太さは約二センチほど。取付けには、オウネンボウの枝にマガリヤスをそわせ、マガリヤスの根元にあけられた小穴に鉄製の釘をさし込んでとめ、さらに直径二センチほどの鉄製の環を柄にはめて固定する。(写真参照)

マガリヤスの柄にオウネンボウの枝を用いる理由は、枝が自然状態でも彎曲しているのにあわせ、良く撓しなる(しなやかに撓たわむ)こと、さらに丈夫(強く折れにくい)というので良材とされてきたためである。

このオウネンボウの柄のあとに、カシ材の一メートル三十センチほどの棹（柄）をたし、その後に、水深にあせて、五メートルほどの竹棹（竿）をつける。

カシ材の棹も短いものは三メートル、長いものは五メートル以上といろいろあるが水深にあわせて使いわけると、マガリヤスは長さのちがう数本を用意して出漁するのが普通である。

マガリヤスも他の道具と同じく、鉄製の環などと共に島内の内浦にあった本保鉄次郎^{ほんぼ}という鍛冶屋に注文して製作してもらった。

また、オウネンボウ（カマツカ）の木は島内にはめつたにないので、あり場所をおぼえておかなければならない。話者の五十嵐作松氏は島内の数ヶ所にオウネンボウ（ウーネンボー）のあり場所を知っているという。

マガリヤスにするオウネンボウの枝は、秋口に山で見つけておいたものを切り、枝を焚火で「ノス」（曲げる）。マガリヤスにする枝の形状を曲げたあと細紐でしぼり弓状に曲げて枯らす。弾力もあり、丈夫な枝なので十年以上使用しているものも多いという。

このオウネンボウ（カマツカ）の木は新潟県の山北郡の山などにも多いと聞いたが、実際に入手するために出かけたことはなく、島内のものでたりていたという。

タコを捕獲するには、まず、上述したマガリヤスでタコの巣（タコアナ）を探す。穴の中にタコがいれば、「ヤス」が体にさわる前に足にさわる。これを一気に突きさすとタコはヤスを切る（いったん離す）。もし穴が広ければ、クケ道という逃げ道をにげる。その道に他の穴からつくのである」^{注(5)}という。

この時に用いるマガリヤスは、穴からタコをおびき出すために用いるものである。

「マガリヤスは四尋、五尋、六尋、七尋、の四本を用意する。穴から出たら四本（四又）のヤス（オウツキヤス）というヤスで大ダコを突きさすのであり、もしどうしてもとれないときはそのままダッテ（捨て）しまふ。蛸穴のある所は浅くて一ヒロ、深くて十一ヒロから十二ヒロまでで、大きくて八貫目、普通四、五貫目で、単位はハイで示す。以前は冬至頃になると穴にくるといわれていたが、今はこなくなったという。蛸は島の正月にはなくてはならないものである」^{注(6)}とみえる。

「オウツキヤス」は「オウヤス」とか、「タコツキヤス」ともいう。

話者の五十嵐作松氏が所有していたオウツキヤスの実測した大きさは、四本に枝分かれしている部分よりモリの先端までの長さが約十八センチ、枝分かれしている根元の部分から柄に取付けられている部分までの長さ約六センチで、全体の鉄製のモリの全長は二十四センチ。ヤス先の先端部分の横幅は約十センチで、約三センチ間隔で四本のヤスが枝分かれしており、左右の二本ずつが一对になるような形で内側にイカシが付いている。（写真参照）

イカシの長さは約二センチ、ヤスの太さは約〇・七センチほど。この鉄製のヤスを長さ約一メートル、太さ約三センチのカシ材の柄に取付けてある。

このヤスも島内の本保鉄次郎という鍛冶屋に注文して製作してもらったものだという。話者による実測したヤスは「ナカヤス」（中ヤス）ともいい、「オウヤス」（大ヤス）より少々小さく製作されており、「オウヤス」は、もうヒトカサ（ひとまわり）大きなものがあるのだという。最も大きな「オウヤス」は先端の横幅が五寸（約十五・六

センチ)はあったという。また、小さなヤスは「コヤス」(小ヤス)といい、先端の横幅は三寸(約九センチ)ほどだったという。

このオウツキヤスのカシ材の柄に、さらに長いカシ材や竹材の柄を付けて使用した。ヤスのカシ材の部分は、大工にカシ材の櫓の古いものなどを割ってもらい、自分で焼いて曲げをなおしながら自製したこともあったという。

話者の五十嵐作松氏によれば、近年になってから新しい「ゼンバコ」(銭箱の意でタコ穴をいう)を三つほど見つけたという。漁場は「山をかける」。

他の人々にわからないように、夜明けを待たずに出漁し、夜が明けるのを漁場近くで待ち、明るくなると「山をかけ」てタコを突く。多いときは、一日で五匹(ハイ)も突いたことがあるというが、普通は一日一匹(パイ)ないし二匹(ハイ)ほど。

海中がにごっているとタコ穴が見えないので、潮の澄む十二月末から三月頃が最盛期となる。

タコは一匹(パイ)突いても、翌日の朝になると、また同じタコ穴に入っていることが多いという。また、一月末から二月になると一つのタコ穴に二匹(ハイ)のタコが入っていることが多く、雄ダコは穴の玄関(入口)にて餌を捕り、雌ダコは穴の中にいて、雄ダコが餌のアワビや魚(コブダイなど)を捕えて、雌に与えているのだという。コブダイはタコ穴の中に入っているのをタコが捕えるらしい。

また、タコ穴のある場所は、アワビの殻や魚の頭や骨などを入口に出しているので見つける目印になるという。タコ穴は最も浅い場所では水深一メートルほどのところにもあり、こうした浅場のタコ穴には漁期の始まり頃に多く入っていることが多いという。

大きなミズダコは二十キロから三十キロも重量があるので、船に近づいたらすぐに船上に引き揚げるようにする。そのためには、オウツキヤスで突いたタコが船に近づいてきたとき、タコの頭(胴)をさわると、足を巻き上げてくるので、その時を見定めて、一気に船上まで引き揚げる。大きなタコを突くと、オウツキヤスでも折れてしまうことがあると聞いた。

その他、四月頃にタコが刺網にかかってくることもあるという。

イソザカナ(磯魚)は年間を通してイソミにより捕獲されてきたが、その主な魚種はヒラメのほかメバル・アイナメ・シマダイ・クロダイ・ジンダイなどであった。

ウオツキ(魚突き)をするには魚種により「ヤス」の大きさを変えた。メバルやアイナメなどは二寸から二寸五分ほどのヤスを使い、大きな魚を突くときは三寸から三寸五分ほどのヤスを用いた。

また、ヒラメなど、特に大きな魚を突くときにはタコツキヤスの小さなもの(コヤスという)をもちいることもあった。

「コヤス」はヤスの先の鉄製の部分の幅がそれぞれ二センチ間隔ほどの四本にわかれたヤスなので、ヤスの先端の横幅は全体で八センチほどだが、それより大きい「ナカヤス」は横幅の間隔が三センチほどあるので十センチほどある。

ヤスはいずれも島内にあった鍛冶屋に注文して製作してもらった。

鉄製のヤスには「チヤス」というカシ材の長さ一メートルほどの柄（棒）をつけ、その後に「タケガラ」とよばれる竹棹（竿）をつける。このようなチヤスやタケガラはすべて自製した。「ヤス」の柄については、全体をヤスガラと呼び、特にカシ材の部分についてチヤスというのだと聞いた。竹は島内に多く自生していた。

イソミで船上よりワカメを採取するには、農業用の草取り鎌を竹棹（竿）に縛りつけ、刈り取ったという。この草取りの「カマ」は島内の鍛冶屋が製作したものであった。

その後、戦後になり、山形県の飛島で使用していたアラメ採取用の「ネジリマタ」（アラメマタともいう）とよばれる二又のY字型をしている竹製（太さ約一センチ・二又の部分の長さ四十センチ・先端部分の全長約八十センチ）の道具を竹棹（竿）にすげて使うようになった。その後、さらに「ワカメトリガマ」（メカリガマともいい、飛島で実測したものは鉄製でプロペラ状。一辺の刃の部分十二センチ・刃の最も厚い部分は〇・一五センチ・刃の最も厚い部分幅二・八センチ、風車のような形状の道具をねじって使うもの）を導入したという。

エゴは「エゴヤス」または「エゴトリヤス」と呼ばれる道具を用いて採取される。

この道具の形状は、太さ一センチ、長さ六十センチほどの木の枝を四本そろえて、シラガシ（白樫）材の柄の先端に縛りつけたもので、先に行くにしたがって四本の枝に広がりをもたせるもの。木の枝はズミまたはオウネンボウが選ばれる。いずれも弾力性に富、丈夫な材である。

また、エゴを採取する際に、すべらないように先端の四本の枝の部分には木綿の細紐などを巻きつけて用いるこ

ともある。エゴヤスの大きさには個人差がかなりあり、巻き取る力の強い人は、さらに、大型の道具を自製して使っていたという。

エゴが繁茂する漁場の水深は、浅い場所で、二メートル、深い場所では四メートルから五メートルはあるので、水深にあわせて大きさやカシ材の柄や竹棹（竿）の長さを調整するようにしていた。

近年になり、エゴは自家消費用として用いることが多くなり、トコロテンのようにして食べることも多いが、以前は左官屋が壁ぬりをする際の「のり」としての需要が多かったという。また、薬品の原料として組合でまとめて出荷していたと聞いた。

船上から海中や海底の捕採対象物を見定めるために木枠の底に板ガラスをはめた道具を使った。「ミズカガミ」といつていたが、最近では「ガラス」とも呼ばれている。

「ミズカガミ」が使用される以前は海面に油をまいてイソミをしていたということは聞いたことはあるが、どのような種類の油であったかは聞いていないという。

話者の一人である五十嵐作松氏が所有していたミズカガミを実測した結果は、ガラス面の底の部分が長い方で三十六センチ、短かい方が二十七センチの長方形。上部の顔をあてる部分は長い方で三十センチ、短かい部分が二十一センチの長方形。いずれも外側の実測で、杖質は杉材。板の厚さは約一センチで、深さ（高さ）は二十五センチであった。島内の大工に注文して製作してもらったものであるという。（写真参照）

「ガラスが島にはいつてきたのは明治中期で、源十郎の富太郎というものが庄内加茂からもつてきた。その前は、

海面を穏やかにして魚見をする方法として原油を使った。それ以前は竹で作った油壺に、エグサ油・菜種油を入れ、舟にぶらさげておき、棒につけて海面に垂らした。それ以前は、ネシ（ツヅミ）を家で煎っておいて、それを口にくわえてガリガリとかみ、それをフツと海面に吹き散らした。このネシをまいた上へ種油をまくのである。そのまた以前をたずねると、鮑をとってそのワタ（内臓）を口にふくみ、海面に吹きつけた。これをクルミといった。以上のように四種類の変遷のあとをたどることができる。」^{（注7）}という。

（六） 漁船（サンパ）・その他の聞取り

粟島で伝統的に使用してきたイソミをする小型の漁船は「サンパ」と呼ばれてきた。「イソミブネ」ということもある。

サンパの一般的な大きさは、肩幅四尺二寸、長さ二十五尺。「粟島の蛸穴」^{（注8）}によれば「シキとも五枚、幅（最大）一・五メートル、長さ六・七メートル」とみえる。『離島生活の研究』によれば、「無動力船はすべてサンパ舟（全島で一七五隻）。動力船はチャッカという（もとはダッチといい、一五隻ある。内浦六、釜谷九）」^{（注9）}とみえる。

サンパの各部分の名称は、ミヨシよりガッチョマ・ドーノマ・アカノマに分かれていた。アカノマは、船中にたまったアカ（海水）を汲み出す場所なので、その名称があるという。一人または二人で操業することが多い。

センドウ（船頭）はトモのトコの中央に、「ミズカガミ」を持って海中、海底を覗く。またトモのトリカジ側の

トコにカイ（櫂）をつけて操船する。したがってサンパは後方（トモ）の方向に進みながら操業する。サンパとしてはバックしながらイソミをすることになる。

サンパの舳にあるガッチョマの底部には小さな穴があげられており、栓をはずしてアカ（海水）を出すことができるようになっていた。ガッチョマとドーノマとの間にはハリがあり、「サノマリ」とか「フナバリ」とか呼んでいた。また、ドーノマとアカノマの間にもドフナバリとよばれるハリがあり、トモにもフナバリがあった。トモのフナバリは、その上に櫂をあげるのでカイアゲフナバリとも呼んだ。

センドウ（船頭）は常にトコから後方を向いてイソミの操業をするので、サンパは後方へ進むように操船する。

夏の季節には「ヒボリ」といって、カヤをたばねた松明（タイマツ）に火をつけ、夜間にスズキやマダイ等をおこすことを八月下旬頃までおこなっていたので、その時は、テコと呼ばれる者がドーノマに立って海中、海底を見定め、スズキ等を突いた。しかし操船するのは一人であった。『離島生活の研究』にも、「夜の漁としてヒブリというのがある。これは島に人が住みついた当初からあったのであろうといわれている。タイマツといって菅を焚き、主としてスズキをとるのである。」^{注(10)}とみえる。

アカノマのイケスには採取した貝類などを入れるがタコや魚類はドーノマの船底が一尺ほどの深さのイケスになっているので、深い方のドーノマのイケスに入れた。

サンパを建造する船大工は島内の釜谷にもあり、調査当時でも仕事をおこなっていた。船材にする大きな杉の木が島内にあったので、それを製材してサンパを建造してもらった。また、サンパを操船するための櫓や櫂も船大工に製作してもらったという。

その他、タコを捕獲する際は、タコ穴を他人に知られないように、夜が明けないうちに船を出し、夜明けを待つて、赤松の根を焚いてあかりとしてタコ穴を探した。タコ穴は、浅い場所では水深約一メートルというところにもあった。また、寒の内におこなうタコ取りの時などは、カムラという浜までサンパに乗って出かけ、そこから後は歩いて出かけたこともあったという。それも他人にタコ穴のある場所をさとられないための努力であった。

一本釣はタイ・マイカ・スズキ等を漁獲対象にしていた。はやければ四月初旬頃からはじめ、七月いっぱいまで。年によつては八月の中旬頃までおこなうこともあった。六月、七月にかけてはマイカを釣った。また、この時期はマダイのハエナワ漁をおこなうこともあった。マイカ釣りよりマダイ釣りの方が価が高く売れた。

ハエナワ漁は年中おこなわれており、タイ・ブリ・アブラザメなどが主な漁獲対象であった。アブラザメを漁獲するハエナワは一枚の縄の長さが百五十尋（一尋は五尺）その幹縄に五尋間隔で約十尺（二尋ほど）の長さの枝縄を三十本（針）つける。餌にはイワシを使った。幹縄、枝縄ともに材質は麻であったため、ハエナワが浮かないように縄を海底に沈めるためコティシとよばれる石材の錘をつけた。

アブラザメは低ハエナワで漁獲してきたが、あまり漁獲があがらなかった。そのうちに山形県の飛島では底刺網でアブラザメを漁獲していることを知り、サメ底刺網を一月から三月にかけておこなうようになった。この漁法が伝えられた年代は明確でない。ただし、飛島から教えてもらったのはたしかだという。

また、新潟地震以前は、粟島の周辺には浅瀬が多かったこともあり、サメが産卵のために多く集まってきた

ので、島の周辺の浅瀬には小さなサメがたくさん生息していたが地震後は海底の地形が変化してしまったため、サメの数も減少してしまったという。

刺網はタラの底刺網をはじめ、タイ・ブリ・ヒラメの刺網を三月から五月いっぱいまで、そのあとトビウオ・タイ・ヒラメ・イナダなどを主な漁獲対象物として刺網漁をおこなった。

刺網は一反が五十間の長さで、それを十反つなげて流した。タラの底刺網のときは十二反から十三反を流すのが普通であった。

また、トビウオの漁獲には浮刺網を使ってきたが、現在（調査当時）では船の数が多く、航行に危険だということもあり、トビウオ等の刺網も底刺網に変わったと聞いた。

刺網を海中に入れる時は、身体に網をかけ、網にからまると危険なので、注意が必要だという。

その他、漁獲物は昔も今も島内の内浦にある漁業協同組合で集荷され、仲買人に売ったというから、昭和二十年以降のことをいっているであろう。また、山形や新潟と連絡をとり、値段の高い方へ出荷したという。

また、新潟地震後の昭和四十年頃になり、千葉県のモグリが入漁してアワビ採取をおこなったことも数年はあったという。

最後に本稿の主題にかかわりがあるので、この島に伝えられてきた「銚突観音」にかかわる伝説を上掲の『越後風俗志』第二編より引用しておく。

「前略：天平年間といふから紀元一千三百九十年から四百年代である。（神武天皇即位のB・C六六〇年を紀元元年とする明治以降の年の数えかたによる年号。天平間間は西暦七二九年～七四九年にあたる）

ソノ頃、外浦の釜屋に、亀太郎といふ漁夫があつて、銚突きの名人であつた。彼の眼にとまつては大抵の魚介は、其の銚から逃れることができず、槍先ならぬ、銚先にかかつて、忽ち突き上げられるのであつた。

腕自慢の彼は、毎日毎夜、倦むことを知らず岩から岩を飛び回つて銚突きの妙技を振ひ、いつも其の結果の上首尾なのに、ホクソ笑んで自ら楽しむ彼であつた。或る夜、例によつて、仏崎附近に出かけて、得意の妙技に無（夢）中になつてゐたところ、何処よりもなく、「カメラロウ」と呼ぶ声がする。ハテ、奇怪なことばかり、あたりをみまはしたが何ものの影も勿論眼には入らなかつた。すると再び、カメラロウと呼ぶ異様な声が起こる。それは海中からである。驚いて海面をすかして見ると奇怪々々、岩かげの海底からは燦然としてまばゆきばかりの怪光が眼を射るのであつた。

不思議なこともあるものかなと、亀太郎は無気味に思ひ乍らも、銚を以て是れを突き上げて見ると、アラ勿体なや、いとも尊き一体の観音像であつた。驚嘆した亀太郎は、まことに不思議なることよ、コハ勿体なしとばかり、三拝九拝して之れを携へ、直に内浦に至りて事の次第を人々に告げたるに、何れも其の奇異に感じて厚く帰依信仰し、これを「銚突観音」と称へて堂宇に安置し、今も尚ほ島人は深く崇敬の念を捧げているのだ、と斯ういふのが

其の由諸なんである。

ところで、それだけなら話しの筋が通つてゐるのであるが、茲に奇怪なのは、観音像を海から拾い上げて持つて帰ると、亀太郎の眼がつぶれたというのである。

折角、海から上げたといふのに、何んのご利益もなく眼がつぶれては、一向につまらんじやないか、と僕、カメ太郎に同情したら、なあに、ソリヤ銚で突き上げた仏罰さ：以下略」とみえる。

この伝説については、小泉蒼軒の『粟島紀行』中にも記されており「叉子」または「魚叉突」と表記している。

また、観音像を拾いあげた岬は、のちに「仏崎」とよばれるようになったことで、この観音像は等身大の樞材の十一面観音像で平成七年には村文化財の指定をうけたことのほか、釜谷の文造という者が康和年間（一一九九―一〇四）に拾いあげたなどの諸説が伝えられている。（写真参照）

（七）まとめ

この資料調査は著者が平成十五年（二〇〇三）八月八日から八月十日にかけて実施したものである。調査の内容は新潟県岩船郡粟島浦村釜谷に在住の小萩勇藏氏（昭和九年二月二十日生）及び、同粟島浦村内浦に在住の五十嵐作松氏（大正十年十一月二十八日生）からの聞き取りによるものである。また、写真撮影や実測をさせていただいた漁撈用具（民具）については、アワビカギのみが小萩勇藏氏所有のもので、他はすべて五十嵐作松氏の所有するも

のである。

あわせて、栗島浦村の農業生産暦及び、その他の農耕生活にかかわる聞取りは同釜谷の松浦キイ氏（大正十三年十二月四日生）によるものである。松浦キイ氏宅は調査当時、松太屋旅館（先代が松浦太郎左衛門といった）に内浦から昭和十九年に嫁に來たと聞いた。その頃は、釜谷には電気もなく、昭和二十七年に電気がつき、はじめてラジオが聴けるようになったという。

「はじめに」の項でふれたように、ミズダコの捕獲方法と、この地に伝わる「蛸穴」にかかわる漁撈習俗や、本稿の調査当時、すでに消滅しようとしている漁撈伝統があまりにも多いことに危惧の念をもたざるを得なかった。

その一つは、「蛸穴」の所在が伝承されなくなってしまったとともに、ミズダコを捕獲する漁撈技術が消滅しようとしていることである。

このようになった原因は漁船が近代化、大型化し、漁業方法が変化したために生産性の低い「イソミ」に従事する漁民がすくなくなったことである。現在では、すくなくなったというよりも、いなくなったといったほうが当てている。

ようするに、漁業生産力の高い魚種、漁法に生業が移行していく時代の潮流の中で、「イソミ」を継承する漁業者がいなくなり、これまで大切にされてきた「蛸穴」の存在も無用になってしまった現実がそこにあるといえる。

参考文献及び引用文献

- 小泉善平（其明）『粟島図説』 天保三年（一八三二年） 越佐叢書（所収）第八卷 野島出版（三条） 新潟県立図書館蔵 一九七六年
- 小泉蒼軒『粟嶋紀行』（『粟島見聞録』所収 粟島浦小学校 大滝友和）新潟県立図書館蔵 一九九四年
- 大平与平次編著『越後風俗志』 温故談話会刊（長岡） 『神秘郷・粟島 今は昔』（明治後半期と昭和初期の島の姿）所収 安藤 潔編 粟島浦村教育委員会刊 新潟県立図書館蔵 一九九四年
- 金子 忠「粟島の蛸穴」『民間伝承』 通巻二五一 第二十四卷第七号 一九六〇年
- 刀桶勇太郎「日本海三島嶼（飛島・粟島・佐渡）に於ける蛸穴の慣行と紛争について」『海事史研究』 第五十号 一九九三年
- 日本民俗学会編『離島生活の研究』 北見俊夫「新潟県岩船郡粟島」 一七九頁～二三三頁 集英社 一九六六年
- 北見俊夫「越後の粟島」『民間伝承』 通巻第十五卷第四号 一九五一年
- 北見俊夫「粟島」『しま』第六号 一九五五年
- 高橋文太郎「越後粟島探訪録」『旅と伝説』第六卷十一号 一九三三年

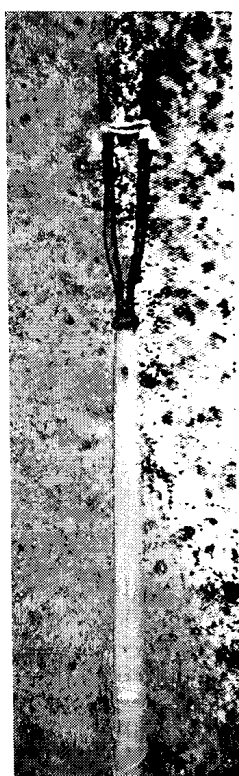
注

- (1) 小泉蒼軒『粟嶋紀行』(『粟島見聞録』粟島浦小学校 大滝友和 九十頁 一九九四年による) 原本は新潟県立図書館所蔵
- (2) 小泉善平(其名)『粟島図説』天保三年 越佐叢書(所収) 第八卷 野島出版(三条) 三二六頁 八頁 一九七六年 新潟県立図書館蔵
- (3) 大平与平次編著『越後風俗志』 温故談話会刊(長岡) 明治二十八年刊(一八九五年) 『神秘郷・粟島 今は昔』(明治後半期と昭和初期の島の姿 一六頁所収 安藤 潔編 粟島浦村教育委員会刊 一九九四年
- (4) 金子 忠『粟島の蛸穴』 『民間伝承』通巻二五一 第二十四卷第七号 一九六〇年
- (5) 注(4)と同じ 三六頁
- (6) 注(4)と同じ 三六頁、三七頁
- (7) 日本民俗学会編『離島生活の研究』 北見俊夫『新潟県岩船郡粟島』 二〇五、六頁 集英社 一九六六年
- (8) 注(4)と同じ 三七頁
- (9) 注(7)と同じ 二〇一頁
- (10) 注(7)と同じ 二〇四頁

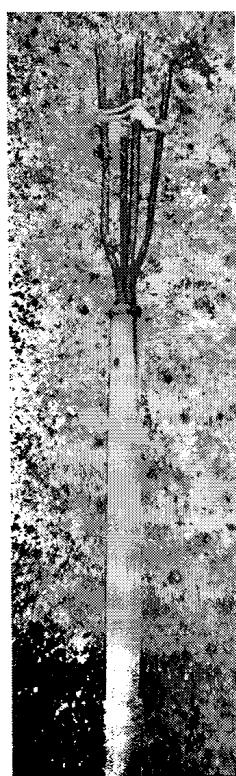
(たなべ さとる 本学教授)



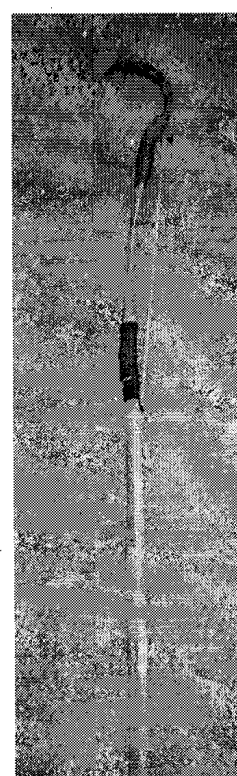
タコツキヤス(ナカヤス)



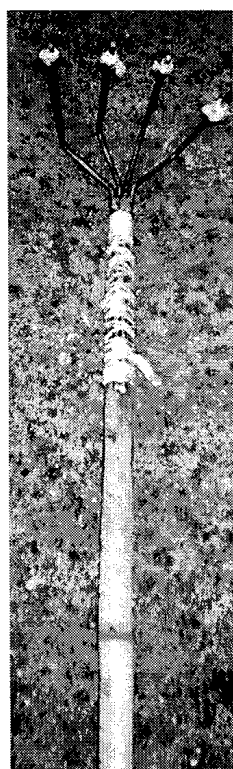
サザエヤス



サザエツキ



アワビカギ



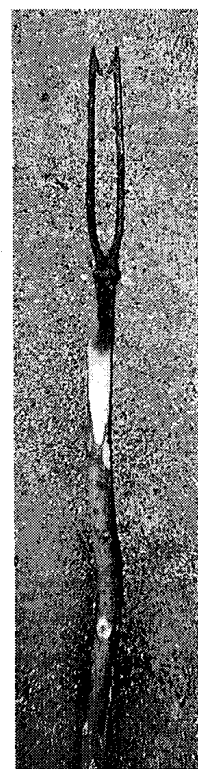
エゴヤス
(エゴトリヤス)



マガリヤス



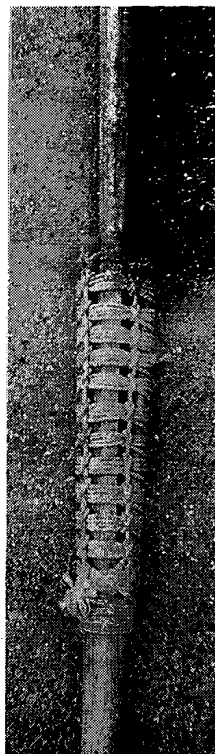
マガリヤス



マガリヤス



アワビカギ (アワビヤス) でアワビを剥がす状況



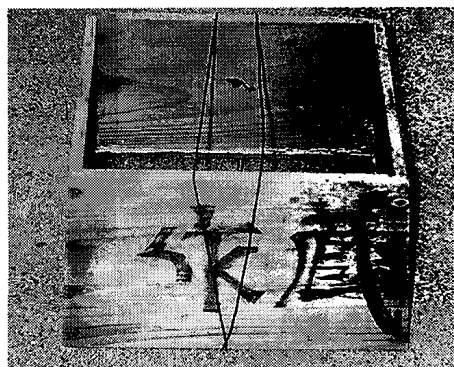
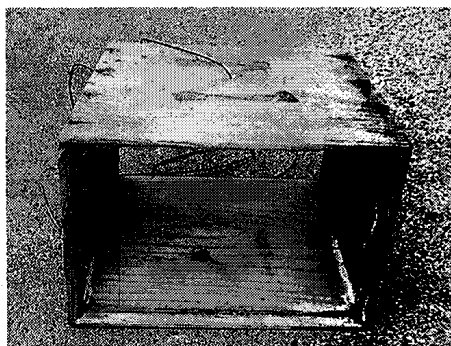
チャス



チャスを継ぐ部分



モテの棒 (エゴヤス)



ミズカガミ (ガラス)



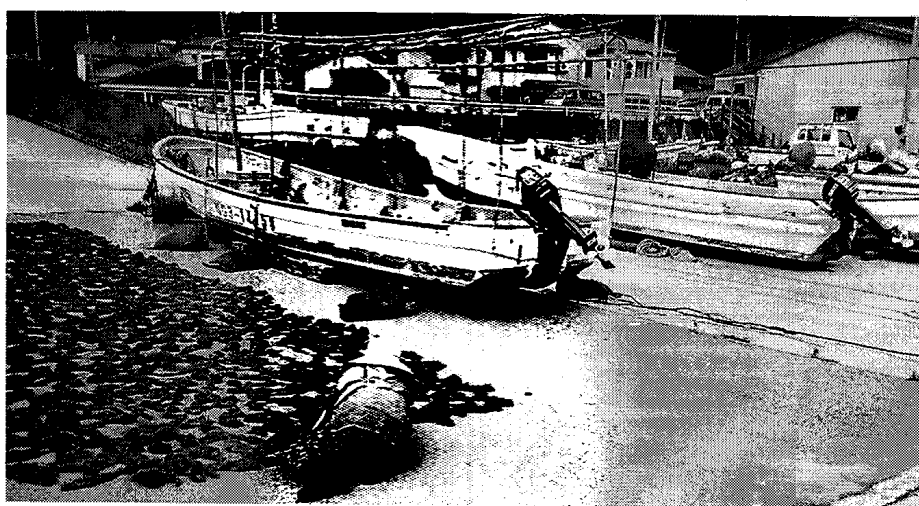
マガリヤス



栗島遠望



釜谷の港と
集落

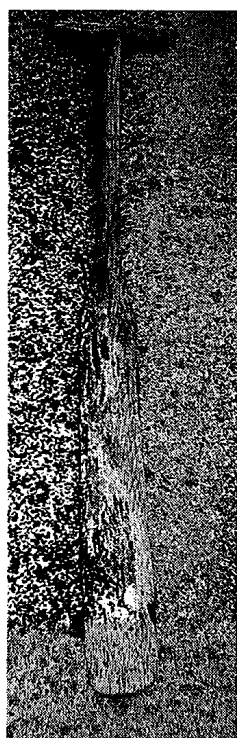
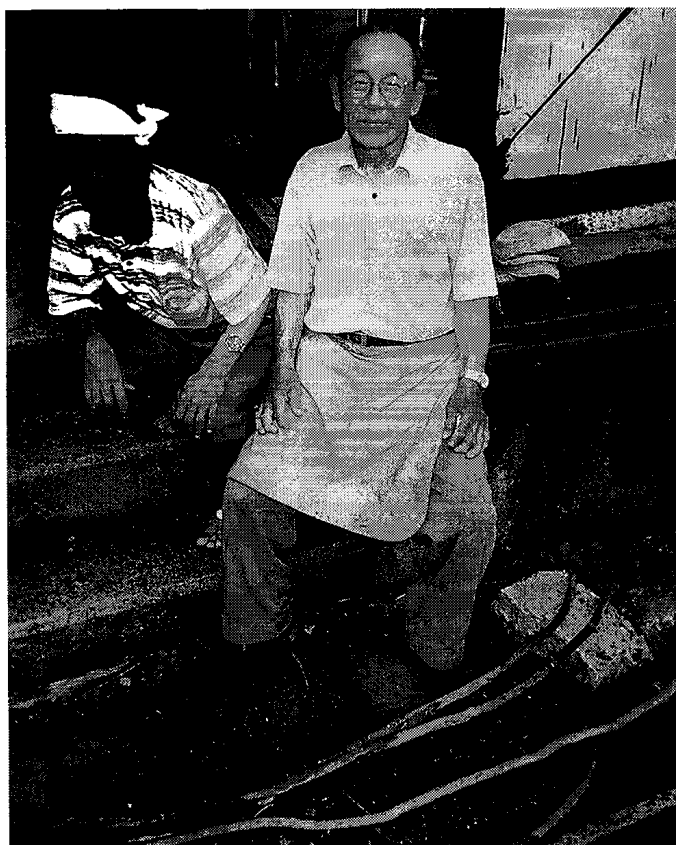


現在使用のサンバとエゴの天日乾燥



猪突観音立像
『神秘郷・栗島』
安藤 潔 編より
(転載)

話者 五十嵐 作松氏(右)
小 萩 勇蔵氏(左)



カイ



エゴのゴミトリと乾燥